

ぶらりわが街宮沢界限

(48) 宮沢町の「諏訪神社」 一大イベント「秋季大祭」

人々が「神」とともに思う存分に飲み食い、境内では各種団体の売店や露店が並び、奉納踊り・宮澤太鼓、榊(さかき)・子供神輿(みこし) 町内巡行(渡御(とぎょ))など夏休みの終盤を彩る風物詩として、多くの老若男女に楽しみ親しまれている宮沢町の「諏訪神社」令和元年の秋季大祭日は日程8月24日(土)25日(日)です。

◎ 祭りー日本の神社では、一年を通じて様々な祭りが行われている。理由は、神の御加護を受けるためにという一言に尽きます。祭りを執(と)り行う場、神のおわす場として造られたのが神社です。

◎ 秋季大祭ー御神体の遷御(せんぎょ=神霊を神輿などに分け移すこと)を伴う祭りで、祭りの前に神職は正装で臨み(*「立川諏訪神社」立川市柴崎町の宮司(くうじ=祭祀を司る責任者)氏子が禊(みそぎ)や精進潔斎(しょうじんけっさい=身を清めること)をする)。



(写真上) 御神体を遷御する儀式

なぜ大祭は春と秋に多いのかは、農耕と深くかかわる行事で、春祭りは耕作にかかる前に、作物が十分に実ることを願う祭りだが、多くは神職など限られた人で静かに行われる。それに対して秋祭りは神輿(みこし)の渡御などにぎやかなものが多い。それは本来、収穫後に神に感謝をささげる祭りであるが、その年の農作業を無事に終えたことを祝う、年に一度の楽しみとしてとらえられている。

祭りの基本的な構成「三段階」まず神を迎え「宵祭り」(宵宮) 祭りに携(たずさ)わる人たちが身を清めて準備する。→神をもてなす「本祭り」祭りの当日。→神を送る「後祭り」(裏祭り) 本祭で使った祭具、神輿などの後片付けをしてから宴(うたげ)を行う。

◎ 祭りに神輿を担ぐのはなぜ?ー威勢がいいかけ声とともに町中を練り歩く神輿や山車(だし) (「だんじり」ともよぶ)は祭りのクライマックスです。「諏訪神社」は、宵祭り24日に「榊神輿」・本祭り25日に「子供神輿」(写真左)です。神前で神職が行う祭りが人の目にふれることは少ないが、神輿や山車の巡行は多くの見物人を集める。



祭りのあいだ、神輿には本社の神殿から分けた神霊が、その氏子町内をまんべんなくまわり出てすべての者を災いから守り、その幸せを祈るためです。

神輿渡御の最中に「揉(も)む」とか「練る」といって神輿を激しく揺さぶることは、神の威光を強くするという意味がある。日

本の神は、敬(うやま)えばその威光を増すが、放っておくと弱くなって、力をうしなってしまう。そこで、神の力を増すため、祭りでふだん神殿に鎮座している神様を外へ連れ出し、神輿にのせてそれで、わざと激しく「揉む」「練る」ことで再び神の強い力を持つようになる。

◎ 榊神輿ー神社の儀式で使われている神への捧げもの「玉串(たまぐし)」代表的に榊が使われる、これは神のいる聖域と人間住む俗界の隔てる木「境の木」が転じてサカキになったと考えられている。(写真左) 町内を渡御する榊神輿



古くから植物には神が宿るといわれ、特に枝先の尖った葉の先端部は神が降りる「依代(よりしろ)」と尊ばれ、葉質が堅く常緑樹は神徳が枯れることなく永遠に続くことを意味する代表が榊です。

◎ 榊の自然分布ー関東南部以西〜九州は長楕円形の先が尖った葉で光沢がある本榊または真榊(まさかき) 関東中北部〜東北は真榊より小ぶり、縁にギザギザがある



るヒサカキが用いられる。

諏訪神社はヒサカキです。榊神輿の枝を手に入れば、一年間無病息災で過ごせると言われている。(写真右) 真榊(左)とヒサカキ(右)

* 参考文献・資料ー「神道と神社」・「お寺と神社」(河出書房新社)「神社と祭り」(幻冬舎)

「読売新聞」等

(文・写真) 防犯宮沢支部 西山 禎一